彙報

心理學讀書會

一月三十日心理學實驗室に於て午後三時半より約三時間に渡つて左の如き講演があつた。

假名とローマ字

野上教授

教授は先づ、國字論に有勝な道德的ともいふべき方面からではなくして、もつと根本的に、科學的に、果して假名とローマ字と何れが、日本語其物を表はすに最も適當であるかを考へてみたいと言つて書き方及び讀み方に付て、片假名、平假名並に、ローマ字を實驗的に比較研究して之を數字及び曲線に表はし、使用上の便利の點から云つて、特に書方の速度に於て、ローマ字は到底片假名に及ぶべくもない事を示された。そして假名の缺點を辯じ、ローマ字論者の主張を難じてから、教授は此の比較論の更に重要なる部分に進まれた。

それは、日本語の性質上、之を表はす文字は、假名とローマ字と何れが順當であるかといふ問題である。言ふ迄もなく文字は言語の符號である。所が日本語は元來、多くの歐洲の現代語の如く、alphabetic でなくして syllabic の段階にあるものである。してみると syllabic の我が國語を表はすに、alphabetic でない syllabic の文字を採用すべきは無論の事である。即ち國語其物の性質上、當然、ローマ字よりも假名の方が遙かに之れを寫すに適してゐると結ばれた。

講演後、各自相論じ、鋭い批評も出て頗る饒かであつた。會する者、千葉助教授、今村醫科教授、須藤三高教授を始め約二十名、讀書會としては稀に見る、盛會であつた。一同散會したのは已に七時を過ぎてゐた。

社會學會

一月三十日午後六時より學生集會所に於て例會を開き左の如き講演があつた。

ミハイロフスキーの主觀的方法論及社會批評の標準

馬場剛

月曜會

○京都文科大學哲學科出身諸學士の組織せる月曜會は都合にて暫く休會せしが、昨年十二月二十五日午後七時學生集會所に會し、先に本誌に植田學士の掲げたる論文『美術史の對象』を主題と爲して討議せり。千葉、高田、赤松、宇野、栖崎、黑田、植田、安部、山内、諸氏來會す。

○二月十四日午後六時、例會を吉田町、大學基督教青年會館に開く。千葉、宇野、赤松、黑田、植田、諸氏出席し、赤松學士の『グループ論』(本年一月本誌掲載)に就て最も雄辯なる討議を爲せり。

新刊紹介

文學士　高田保馬著

社會學的研究

本書は篤學精到な高田學士が明治四十三年以來約八年間の數多い論文中から特に十二章を擇んで纂められた論集である。著者は其の特持の謙遜な態度で「自分にさへ甚だ意に滿たないもの、さぞ缺點に充ち誤謬多い事であらう」と序中に述べられてゐるが由來眞摯なる社會學的述作の乏しい我學界に今著者積年の勞作の結果が形を變へ組織を加へられて公にされたといふことは我々後學にとつて云ふばかりない便宜な事である。

本書は著者が最も多くの影響を受けたギディングス氏の社會學

の篇別に從つて第一篇社會學的方法論の問題。第二篇社會人口及び社會心意の問題。第三篇社會組織及び社會幸福の問題とに分ち、第一篇には、社會進化論の性質、社會法則の性質、統計的方法と歸納法。第二篇には、生死減少逆行の法則、貧富と出生率、分離論、社會的定量の法則。第三篇には、分業に就いて、家族の將來と社會の團結、資本家的集積說の研究、優生學是非、現代文明の淡妄——生產政策の否定等凡て十二篇の論文が收められてゐるのである。

收められたる論文は從來諸雜誌に公にされた數多い著者の論文中から比較的著者の意に滿ちたるものに近いものを收められたのであるが眞面目な學者的態度で眞理追求に餘念ない著者の思想は日々に發展擴充して猶部分的には變改された處も少くないことゝ信ぜられるし、且つ論ぜられたる題目凡てに亘つて此の紹介者自身が定見をもつて居るといふ譯でも無いからして此書閱讀の所感は不日公にせられるべき著者の「社會學的原理」を俟つて述べさして戴くが事宜に適つたことゝ思ふ。私は只此のセカンドハンドで無い著者自身の勞作によつて多大の裨益を受けたことをこゝに述べ併せて此の好著作を汎く一般同學の士に お奬めしたいと思ふ。

東京日本橋本石町寶文館發行。定價金貳圓。（銅直勇）

歐米の佛敎

渡邊海旭著

吾國は今や確かに東洋の中心點となつた、此威嚴からしても東洋の文藝研究だけでも獨立の研究を行ふべき責任がある、然るに支那文藝や歷史の研究すら少し複雜して來ると横文字の御厄介になる狀態である、而して東洋學特に佛敎學の方面には此憐むべき狀態は實に一層悲慘なものである、パーリでも梵語でも考古學でも歷史でも吾國佛敎學の前途遙遠である、吾々國民特に佛敎に關係を有し同情趣味を有する人々は此現勢に對し今や慷慨一番猛然奮起して自己の位置を顧みるべき必要がある、古人は臥榻の下他人の鼾睡を容さずと言つたが今の日本は自己佛敎學研究の臥床を全く歐米人に明け渡して、雷の如き鼾聲を發せしめ、自己は薄寒い室の一隅に畏る〳〵命令を待つといふ憐れむべき狀態である、吾々佛敎學研究に携はれる者、之に對して尙袖手傍觀すべきであらうか、尠くとも歐米佛敎研究の講學は吾國民、吾々佛敎徒に必ず一種の激勵を與へよう、吾國が思想の眞自由學問の獨立に向つて最も適切で且つ手近な努力を鼓吹するだらう、而して東方經營の自覺上歐米の佛敎研究は吾々に幾多の鞭撻を與へ前進を敎へて呉れる、今や吾國の識者財產家所有る敎育ある階級に向つて歐米學者の佛敎研究に向つて眼を開けと呼號する事は東方の經綸上實に止むべからざる苦言として見て頂き度い、埃及博覽會が極めて小規模ながら一部識者に多大の隨喜を買つた今日、何故吾が國民はもつとアジャンタの壁畫や千闥高昌の古經斷片に注意する樣にならぬのだらう。本書出現の目的蓋しこゝにあるのである。

由來吾國に於ける佛敎は一言以て之を掩へば傳道と信仰の佛敎であつた反之歐米に於ける佛敎は要するに批評と研究の佛敎である、約一百年に亘りて研究された歐米の佛敎は實に內容の充實したものであつた、ずつと古い所で佛國で法華經の佛譯が出ればコロンボでマハーヴンサの英譯が公表される、西藏の研究が盛に始